

「日常生活エラーパターン尺度」の開発

○ 兵藤好美 , 田中共子

(岡山大学 医学部) (岡山大学 文学部)

Key words : 危険予知訓練, 日常生活エラーパターン, 妥当性

【 問 題 】

これまで筆者らは、看護学生の臨床実習におけるヒヤリ・ハット事例の収集を通して、学生が起こしやすいミスタイプを分析し、危険予知訓練を実施してきた(兵藤・池田, 2003)。学生の危険予知能力を育成していくに当たり、危険予知と日常生活におけるエラーパターン(Reason, 1984)の間にどのような関係があるかについても、検討を行った。その結果、学生の危険予知項目数とエラーパターン2因子の(記憶・注意因子)該当数の間には、相関は見いだせなかったが、数量化 類による分析では、記憶因子が危険予知項目のいくつかと近く位置することが確認された。

これまでも事故傾性に関する研究において、いくつかの適性検査が開発されてきている。しかしながら、それらはいずれも職業適正審査用に作成された検査であり、学生向けに簡易に使用できる尺度としては、Reason(1984)によるエラーパターン診断テストが適切であると思われる。しかしながらこの診断テストは、エラー項目該当の有無(1,0)を問う尺度で、数量的分析や相関をみるのには不適であり、項目によっては経験する機会のごく少ない項目も含まれていることが分かった。そこで今回我々は、今後の学生並びに新人Nsのヒヤリハットや危険予知訓練に関する数量的分析における使用を視野に入れ、新たに日常生活におけるエラーパターン尺度を作成することにした。

【 方 法 】

【予備調査】2004年5月、A大学の学部生138名を対象として、「日常生活の中であなたはどのようなエラー(間違い、ミス、取り違えをしているでしょうか。）」の質問に対し、1人20個までを上限に自由記述の回答を求めた。そこで得られた896個の記述を分類・整理し、計38項目の日常生活エラーパターン尺度を試作した。

【本調査】2004年6月、A大学2・3回生160名を対象とし、38項目の日常生活エラーパターン尺度に対し、当てはまる程度について、5件法(1:全くない~6:非常によくある)で評定を求めた。また、妥当性を検討するため、海部(2001)の紹介による谷田部・ギルフォード性格検査の一般活動性尺度、のんきさ尺度(3件法)を同時に実施した。

【 結 果 と 考 察 】

因子の妥当性の検証：日常生活エラーパターン尺度38項目に対する回答結果から、度数分布を見て経験する機会が全くないとする回答の割合が、全体の65%を超える項目を除いた。その結果31項目が残り、それらについてPromax回転による因子分析(最尤法)を行った。固有値1以上の7因子が抽出されたが、因子負荷量が低い項目数や2つ以上に負荷量の高い項目を除き、26項目の4因子で再度、Promax回転による因子分析(最尤法)を行った。

最終的に各因子から上位4項目を選択し、2因子以上にわたって負荷量0.40以上を示す項目が存在しないことを確認した上で、計16項目を日常生活エラーパターン尺度項目とした(Table 1)。

4因子の累積寄与率は、44.0%であった。第1因子は、紙で手を切ったり、ボタンのかけ間違い、手が滑ってお皿・お茶をこぼす等、動作を実行するレベルにおける操作エラーを示しているため、【操作エラー】と命名した。

		N = 145			
全体 係数 = 0.867		F1	F2	F3	F4
10	紙で手を切ってしまった	0.631	0.085	-0.040	-0.060
24	ボタンのかけ間違いをした	0.596	-0.007	0.010	-0.034
34	お茶をこぼしてしまった	0.582	-0.167	0.225	0.100
27	手が滑ってお皿を割ってしまった	0.447	-0.087	0.157	0.174
14	電気を消し忘れて外出してしまった	-0.006	0.758	0.034	-0.039
5	買い物で買おうと思っていたものを買い忘れてしまった	-0.228	0.632	0.088	0.116
8	床にあるものを踏んでしまった	0.261	0.449	-0.040	-0.016
16	ズボンやスカートのファスナー・ボタンを閉め忘れてしまった	0.169	0.448	0.015	0.110
19	洋服などサイズの違うものを買ってしまった	0.112	0.148	0.793	-0.190
21	必要なカードではなく、別のカードを出してしまった	0.023	-0.007	0.603	0.033
23	エレベーターで人につられて違う階で降りてしまった	-0.076	-0.116	0.433	0.379
13	図書館・病院などで休日に気づかず行ってしまった	0.160	0.152	0.375	0.061
1	傘を置き忘れてしまった	-0.172	0.083	0.145	0.614
6	切符やチケットをなくしてしまった	0.145	0.235	-0.161	0.604
9	暗証番号を忘れてしまった	0.213	-0.038	-0.160	0.598
25	約束の日時・場所を勘違いしてしまった	-0.064	-0.010	0.282	0.473
固 有 値		4.964	0.785	0.750	0.539
寄 与 率 (%)		31.025	4.909	4.687	3.370

Table 2 因子相関行列

因 子	操作エラー	脱落エラー	取り違えエラー	忘却エラー
操作エラー	1.000	0.485	0.549	0.571
脱落エラー		1.000	0.499	0.565
取り違えエラー			1.000	0.494
忘却エラー				1.000

第2因子は電気の消し忘れ、ズボンやスカートのファスナー・ボタンの閉め忘れ等、行動の途中に本来実施すべき作業手順が抜けてしまうことに関連したエラーであるため、【脱落エラー】と命名した。第3因子はサイズの違うものの購入、別のカードの提出、人につられて違う階で降りる等、本来の目的とは違う行動を、気づかないうちにとってしまうエラーを示しており、【取り違えエラー】と命名した。第4因子は傘の置き忘れ、切符やチケットの紛失、暗証番号の忘却等、記憶が消えてしまうことに関連したエラーであるため【忘却エラー】と命名した。

信頼性分析：信頼性については全体の係数が0.867、各下位尺度についても I.操作エラー：0.696、II.脱落エラー：0.722、III.取り違えエラー：0.715、IV.忘却エラー：0.722を示し、尺度の内的信頼性は概ね高い。また下位尺度間の相関(Table 2)は0.485~0.571であった。

概念的妥当性の検討：概念的妥当性の検討のために、谷田部・ギルフォード性格検査の一般活動性・のんきさ尺度との相関分析を行ったが、相関は見られなかった。

【 総 合 的 考 察 】

活動的でのんきな人が、誤りをするという説(海保, 1999)による予想とは異なり、活動性・のんきさ尺度との関連は見られず、他の妥当性の検討が必要である。今後は、本研究において作成された4要素16項目の「日常生活エラーパターン尺度」に基づき、自分のエラーパターンを判断して貰った上で、ヒヤリハットや危険予知能力との関係を多角的に検討してゆきたい。

(HYODO Yoshimi, TANAKA Tomoko)